

作家の肖像

第 16 回

このコーナーでは、
毎回一人の作家を取り上げ、
美術評論家の酒井忠康先生に、
お話をうかがいます。



Photo: 井上浩二

砂澤ビッキ 1931-1989

すなざわ・びっき
1931年北海道生まれ。彫刻家。
高校卒業後、52年に上京して作家・澁澤龍彦やマンガ家・石川球太らと親交しつつ独学で彫刻を学ぶ。58年、モダンアート協会展新人賞受賞。67年に札幌に戻り、78年に中川郡音威子府村箆島に移住。小学校の廃校をアトリエとし、自然や生命を主題に独創的な活動を続けた。89年に骨髄がんのため死去。

深い沈黙を背負って

ビッキさんと初めて接したのは、1980年代半ば、代表作「四つの風」が展示されている「札幌芸術の森」の開館イベントの時です。パネラーとして、ビッキさんとお話する機会に恵まれました。「大物」らしさを感じさせるゆったりとした所作と、柔らかな物腰。一人静かに、深く、大きな沈黙を背負って立っている——そんな印象を受けました。

豪快で野性的なイメージが強いビッキさんですが、その反面、繊細で思いやりがあり、感受性豊かな人でもありました。それは、アトリエを見ればわかります。道具が大きさごとに、きちんと整理されている。こういったところに、ビッキさんの心の佇まいが表れているのでしょう。大自然に囲まれた音威子府のアトリエで、午前3時に一人鑿を振るっていた時、ビッキさんの耳には、ひそかにアリアが歩いている音さえも聞こえていたように思えるのです。

ともにつくる喜び

ヤナギの枝を組み合わせた作品「樹華」。これはビッキさんが一人で制作したのではなく、仲間と共同制作した作品です。ビッキさんは孤高の彫刻家でありながら、志を同じくする仲間とともにつくる喜びをとても大切にしていました。それは、一種の祝祭ともいえます。厳しい自然環境に一人身を置くからこそ、仲間との共同作業という、いわば「春の喜び」のようなものの大切さがわかるのでしょう。

ビッキさんの作品は、タイトルもいい。「午前3時の玩具」「集吸呼

A」などの独特のタイトルからは、ビッキさんが想像の中で心から楽しんでいるのが伝わってきます。若いころ、作家の澁澤龍彦らと交流を深め、文学から刺激を受けたことが原点になっているのです。

彫刻とは何か

「俺の彫刻は、触れまわる彫刻だ」と、ビッキさんはよく仰っていました。「TENTACLE」(触手・触覚)というシリーズの作品制作にも取り組んでいましたが、カニやエビが触角で周囲を認識するように、ビッキさんは触覚によって世界を捉えようとしたのです。

赤ん坊は、いろいろなものを触れることで世界を覚えていきますが、大人になるにつれ、次第に視覚に頼るようになってしまいます。ビッキさんは、触覚を追求することで、見えないものを、木彫として具現化した。つまり、触覚と視覚を循環させることができたのです。

彫刻というのは、魔術的な要素と、幾何学的・構造的な要素との両方で成り立っています。前者の要素が大きすぎれば形を失うし、後者ばかりだと無機質な作品になってしまう。ビッキさんは、両者の境目を絶えず行き来しながら、「彫刻とは何か」という問いに生きた彫刻家だったのではないのでしょうか。

100メートル走のペースで、マラソンを駆け抜けた——。まさに、そんな人生だったと思います。(談)

酒井 忠康

さかい・ただやす
世田谷美術館館長、美術評論家。
1941年北海道生まれ。慶應義塾大学卒業。
神奈川県立近代美術館館長を経て現職。
光村図書中学校「美術」代表著者。



上／洞爺湖芸術館に再現されている「砂澤ビッキアトリエ展示室」。実際に使用していた工具類や手作りの作業台を配し、音威子府村のアトリエを再現している。
(撮影・井上浩二=2019年)



左／「樹華」

ヤナギの枝を組み合わせてつくられたオブジェ。
後ろに建っているのは、音威子府村の「アトリエ3モア」(旧箆島小学校)。
(撮影・井上浩二=1983年)



右／「四つの風」

赤エゾ松 高さ5.4m 1986年
札幌芸術の森野外美術館蔵
作者の生前の意図を汲み、自然の成り行きに任せ、「風雪という名の鑿(のみ)」によって変化を続けている。2019年9月現在、木柱4本のうち3本が倒壊し、1本だけが立っている状態。
(写真は1986年の開館から数年後に撮影)